

## 史料解題

ここでは、本書において使用した史料のうち、主たるものについて解説を行う。主史料に据えた『知識の光』に関しては、序章で詳細に説明しているので割愛する。史料解題で解説していないその他の史料については、本文中で簡略な紹介を随時行っている。

### 『アムド』ア半島誌

al-Hamdānī: al-Hamdānī (d. 334/945), *Kitāb Sifa Jazīra al-‘Arab (Islamic Geography)*, 88-89), 2 vols, D. H. Müller (ed.), Leiden: E. J. Brill, 1993 (1884).

著者は、Abū Muhammad al-Ḥasan b. Ahmad b. Ya‘qūb b. Yūsuf b. Dāwūd b. Sulaymān Dhī al-Dumayna al-Bakīf al-Arḥabī。ハムダーニーとして知られる。古物学や系譜学、地理学、アラビア語文法学、詩に詳しく、その豊富な著作ゆえに「イエメンの舌 (lisan al-Yaman)」と称された。

ハムダーニーは、二八〇／八九三年頃にサナアで生まれた。あらゆる方面の学問を修めつつ、イスラーム世界の各地を遍歴した。特にイラクには長い間滞在し、またマッカにおいてはイブン・ハラーワイフ (Ibn Khalawayh) (d. 370/980) などの著名な学者と交流を持った。もともと彼が人生の大半を過ごした場所は、イエメン北部山岳地域(上地域)のライダ (Rayda) であった。サアダへ移って以降には、政治的ないざこざに巻き込まれ、二度にわたって監獄に収容されることとなった。三三四／九四五年、サナアの監獄でハムダーニーは亡くなった。

ハムダーニーの代表的な著作である、古代南アラビア諸王国時代の伝承や系譜、詩に詳しい『王冠の書 (Kūn)』は、先行

する著作に加えて、ハムダーニー自身が聞き取った情報をもとに執筆された。全一〇巻のうち、一卷と二巻、八巻、一〇巻の写本のみが現存している。

本書で参照した『アラビア半島誌 (Kitāb Sifa Jazīra al-‘Arab)』は、アラビア半島、特にイエメンに詳しい地誌である。往時の人々の生業や産物、現在では消失した地名や遺跡について、鮮明な記述を残している。今回参照した刊本は、一八八四年にブリル (E. J. Brill) より出版された *Islamic Geography* シリーズの一環として碩学ニユラーによって編まれたものの再版である。第一巻 (*Islamic Geography*; 88) は本文そのものを、第二巻 (*Islamic Geography*; 89) はニユラーによる詳細な注釈ならびに索引を、それぞれ含んでいる。ニユラーは、大英図書館写本 (The British Library, Or. 1383) 他四点の写本をもとに、同書の校訂を行った。

他にもハムダーニーは、宝石に関する書物『古来の二つの宝石 (al-Jawharatayn al-‘Atiqatayn)』や、天文学に関する『知恵の秘密 (Sara‘ir al-Hikma)』を著したことも知られる。『王冠の書』には、現存こそしないが、ハムダーニーの手によるまた別の六点の著作が挙げられているという。

### 『サナア史』

al-Rāzi: al-Rāzi (d. 460/1068), *Ta‘rikh Madīna San‘ā’, H. ‘A. al-‘Amrī (ed.), Dimashq: Dar al-Fikr, 1989.*<sup>2)</sup>

著者は、Ahmad b. ‘Abd Allāh al-Rāzi。ラーズィーとして知られる。出生年については定かではないが、サナアに生まれたとされる。ジャナデイーによれば、ラーズィーは法学やハディース学に詳しく、スンナ派のイマームを務めるなどした。四六〇／一〇六八年、サナアにて逝去。西暦六世紀にヒムヤル王国を助けるためにイランからやってきたレイ (al-Rāy) を出自とする人々がその先祖であった可能性が、al-Rāzi のニスバをもとに指摘されている。

『サナア史 (Ta‘rikh Madīna San‘ā’)』は、著者が生きた西暦一世紀までのサナアの歴史を扱っている。預言者ムハンマドに関連する記事や伝説的要素が多分に含まれる記事が多いものの、サナアに限らないジャナドなどの他の諸都市についても言及しており、アイユーブ朝侵攻以前の南西アラビアの歴史を知るうえで有益な史料である。後代になると、ジャナデイー

の『道程』などに引用された。

筆者は今回、アムリーによって校訂された『サナア史』の第三版を用いた。同書の初版が一九七四年に、第二版が一九八一年にそれぞれ刊行されている。七点の写本をもとに校訂されたアムリー版は、その序文においてラーズイーの経歴と彼が生きた時代の歴史を詳しく取り扱っており、参考に値する。また、脚注や索引が充実しており、サナアの初期史を知ろうと利用しやすい。

同書の末には、アルシャーニー (al-'Arshani) (d. 626/1229) による『サナア史補遺 (Kitāb al-Ikhtisās: Dhayl Ta'rikh Madīna San'a' li al-Rāzī)』も所収されている。ラーズイー没後に著された『サナア史補遺』にはサナアに関する詳しい記事が含まれているが、本書にとって必要な情報が見られなかったため今回は利用していない。

## 『イエメン史』

‘Umāra: ‘Umāra (d. 569/1174), *Kitāb Ta'rikh al-Yaman (Yaman: Its Early Medieval History)*, H. C. Kay (ed.), London: E. Arnold, 1968 (1892).

著者は、Najm al-Dīn Abū Hamza b. ‘Alī b. Ahmad al-Hakamī。ウマールとして知られる。シャーフィイー派の法学者、詩人として活動した。五一五／一一二二年、イエメンのムトラーン (Mutan) に誕生した。五三二／一一三六七年にはザビードにおいてシャーフィイー派法学の学習をはじめ。その後、アデンとザビードを周遊しながら、教師や商人として働いた。ナジャーフ朝やアデンを統治していたシーア派のズライウ朝、マフデー朝の支配者たちとも親交を持った。

マッカに向かって後、ファアティマ朝 (297/909-567/1171) カリフ・ザーフィル (al-Zahir Isma'īl) (r. 544/1149-549/1154) が殺害された直後である五四九／一一五五年に、カイロに到着した。そこで彼は、ファアティマ朝カリフやワズィール・タラーイウ (Tala'i b. Ruzzik) (d. 556/1161) に対する頌詩を詠んでいる。代替わりして後も、ファアティマ朝宮廷にとどまり続けた。アイユーブ朝がエジプトで力を持つようになる、ウマールはシールクーフ (Shirkah) (d. 564/1169) やサラーフ・アッディーンのもとで順応しようと試みたものの、詩によって成功を収めることはできなかった。そればかりか、ファアティ